アーシャ事務局便り

特定非営利活動法人
アーシャ
ASHA アジアの農民と歩む会
事務所・交流センター
〒329-2703 栃木県那須塩原市槻沢８３－１７
ＴＥＬ／ＦＡＸ ０２８７－４７－７８４０

❀ あなたの想いを世界へ、あなたのご寄付でアーシャの活動を支えてください。

2025年度定期総会ご案内

2025年度アーシャ定期総会を開催いたします。詳細は追ってお知らせいたしますがご予定ください。
2024年６月14日（土）午後
場所:那須塩原市健康長寿センター会議室（zoomオンラインあり）
夕方には懇親会を計画しています。皆さまのご参加を心よりお待ち申し上げます。

2024年理事懇談会のご報告

2024年12月18日午後7時より、オンラインzoomで、理事懇談会を開催し、8名の理事が出席しました。三浦副代表からアーシャ事業の中間報告がありました。
＊2022年3月に採択されたJPP事業はカウンターパートのMGVSにインド内務省の許可が下りず開始できなかった。12月20日JICAとのミーティング予定。(2月辞退届を提出)
＊SCSAD学生の奨学金のためクラウドファンドを実施したが、目標額に達成せずやりくりして開始。ミャンマーからの2名は政治事情により中途で帰国。北東インド3名日本人1名は研修継続できた。
＊3月インターンシップ・スタディツアー参加者を増やしたい。
＊AOAC/AVSの活動は厳しい中でも自立できるよう支援している。
＊報告の後、参加者より、活発な意見交換がありました。

グローバルセミナーご案内

2025年7月26日午後、宇都宮市国際交流センター(TIA)にてグローバルセミナー:アーシャが担当します。第一部は村のインフルエンサーシータさんについてのワークショップ。第二部はインド発祥の笑いヨガ体験を予定しています。

会員ご継続とご寄付のお願い

当会の活動は会員の皆様の会費とご寄付に支えられています。皆様よりご支援･ご協力をいただき、活動を継続できていることを心より感謝申し上げます。2025年度の活動を発展･強化するため、引き続き会員ご継続と会費のご納付をお願い申し上げます。ご寄付･募金もご協力くださいますようお願いいたします。
http://ashaasia.org/shien1/
ネットショップ「ASHA STORE」ではフェアトレード商品の販売に加え、会費、ご寄付、募金の納付も扱っています。ご利用ください。
https://ashaasia.stores.jp/
振込用紙の必要な方は事務所までご連絡ください。

STORE

事務局よりお知らせ

会費・寄付ありがとうございました。 2024.11.16～2025. 3 .31 順不同、敬称略

誤字・記載漏れがございましたらご面倒でも事務局までご連絡ください。よろしくお願いいたします。

正会員	【山形県】志藤正一、三浦恒祺【栃木県】菊地創、西田京子、村端淳子、カバリェロ優子
賛助会員	【埼玉県】川口良樹、定子【長野県】青野勝【愛知県】伊藤幸慶【兵庫県】藤岡秀英 【北海道】伊藤遼太【山形県】長南正明【栃木県】渡部静子、漆原雅子、菊地紀子、小高加代子 【東京都】吉田千佳子、谷端賢一、林美奈【三重県】岡言紀、植西美貴【岐阜県】立小川優季 【大阪府】木田明里【兵庫県】渡部歩武
終身個人賛助会員	【大阪府】山本よしこ
一般寄付	【栃木県】カバリェロ優子、柴本沙南、漆原雅子【神奈川県】湯本浩之【福岡県】吉崎彰一
クリスマス募金	【北海道】横山明光【山形県】志藤正一、荘内教会保育園【群馬県】島村めぐみ保育園 【栃木県】川上聖子、菊地創・ふじ、赤羽美智子、村端淳子、小島勇・清子 【栃木県】那須塩原教会、西那須野教会【東京都】石川通子【静岡県】古橋克己
物品寄付	【栃木県】たんぽぽ

■会費
個人正会員 5,000円 団体正会員 20,000円 終身個人正会員 50,000円 終身団体正会員 100,000円
個人賛助会員 3,000円 団体賛助会員 10,000円 終身個人賛助会員 30,000円 終身団体賛助会員 50,000円

マキノスクールは、インド、ウッタル・プラデッシュ州プラヤグラージで活動するサム・ヒギンボトム農工科学大学にある学部で、本会が主に支援している団体です。実施している事業は、アーシャの会員の皆様からの会費・ご寄付、ご支援、インド三浦後援会、日本国外の様々な団体、個人の皆様からのご支援によって運営されています。プロジェクトを実施するにあたり、日本の皆様からの多大なご支援・ご協力に深く感謝申し上げます。

特定非営利活動法人 アーシャ＝アジアの農民と歩む会
＜事務局・交流センター＞〒329-2703 栃木県那須塩原市槻沢83-17 TEL：0287-47-7840 FAX：0287-47-7841
事務局 E-MAIL: info.jp@ashaasia.org ホームページ: http://www.ashaasia.org

☆この会報は日本で製作･印刷しています☆

第７６号 ２０２５年5月１５日

特定非営利活動法人 アーシャ

ASHA アジアの農民と歩む会

会報 **76号**

2025年3月3日から１週間のスタディツアー、２週間のインターンシップ･プグラムをマキノスクールを中心に実施した。写真上は自らカフェとベーカリーシップを営むスタディーツアー参加者、植西美樹さんの自然酵母を使ったパン焼き技術のシェアリング。
写真左は、インターンシップ･プログラム最終日に、マキノスクールにて、学びの成果を発表する参加者の伊藤遼太さん。

出会いを大切に

～農村にこそ人間の根源がある～

インド事業統括責任者･三浦　照男

私の７０年間の人生を振り返ってみると強烈な出会いがいくつかありました。今でも私の人生に大きな影響を与え続けています。

一つはキリスト教との出会いです。地元の高専に入学した１5歳の時、友人に誘われて何気なく教会の門をくぐりました。学校とは違う価値観で話す牧師や体に障害を持ちながらも生き生きしている障碍者である長老との会話。私にとっては別世界でした。だからこそ魅力だったのだと思います。高専卒業まで約１年となった19歳の時に洗礼を授かり、自分の生き方を自ら問い直す機会がありました。このまま卒業、就職とエスカレーター式に進んでよいものかと迷っていた時に、当時通っていた教会の牧師から「過去の学びや価値観に拘ることはない。自分の本当にやりたいこと、神様が喜ぶ生き方を問い直せ」と言われました。もっと自分を奮い立たせてくれる生き方はあるのか、教会の牧師に尋ねた時の答えです。そしてキリスト教を受け入れた後、自らの生き方や人生の目標をリセットすることができました。

バングラデシュという異文化社会での生活

その後、４年間農業や開発などについて学び、1977年27歳の時にバングラデシュのキリスト教主義のNGOに事業付属の農場責任者として赴任しました。配属された任地は南西部の川沿いの寒村で、周りを見渡しても日本人は私のみ・・・しかも当初ベンガル語は全くできないにもかかわらず、重要な責任を与えられました。

４月に赴任した直後、赤痢でダウン。１週間、まともな食事をとることができず、ベットの上。回復後、さあ、仕事を始めるぞ、とばかり、４０℃以上ある日中に村を巡回するやいなや日射病にかかり再度ダウン。それまで、赤痢や日射病の体験がない私は、今後、どうやってバングラデシュで生活できるのか不安のみが募りました。当時、村には電気も水道もない状況で、日本との連絡は郵便のみ。そのような中で、同僚の温かい支えは身に沁みました。また、徐々にベンガル語が理解できるようになるにつれ、友人も増えてきました。

今、振り返ると、バングラデシュの農村は経済的にはとても貧しかったけれども、温かみのある住民との出会いがたくさんありました。いわゆる「ディール」無しで、独り者の私を夕食に招いてくれた同僚、バングラデシュの重要な交通機関である乗り合い船が暴風雨で出航停止になった時、仮眠できる場所を提供してくれた見知らぬ人、週2回のバザールでたまたま知り合った農産物を売りにきていた農民が、徒歩で6時間もかかる彼の家に招待してくれ、ごちそうしてくれたこと、45年も前のことですが、今でも鮮明に覚えています。

農村にこそ人間らしい生き方の鍵がある

豊かな日本で暮らしてきた私にとって、バングラデシュの農村の暮らしは決して楽ではありませんでした。独立したばかりの1970年代のバングラデシュは皆生きることに精一杯という状況でした。大人も子どもも群をなして物乞いをしている状況です。チャンスとあれば道徳的に不義なことでも、それをやってしまう。「仕方がない」と周囲の人がそれを容認してしまうため、その行為がなくならないのが現状でした。

私が現在、20年もインドで活動を継続できている力の原点は、振り返ればキリストの教えと、バングラデシュでの貴重な体験と様々な人々との出会いです。農村には都会にない素晴らしいものがたくさんあります。しかしそれが生かされていない。今のままだと益々悪くなってしまいそうな農村です。伝統的にインドでは合同家族の助け合いが基本になっています。もちろん家族の中でも学問的に有能な者は、都会に出て高額な賃金をもらい、近代的な生活ができるでしょう。しかし、そのような人は非常に限られているのが現状です。家族内に社会経済的な格差ができればできるほど、身内であっても嫉妬や妬みが生じます。現在、この不和の結果として、インド農村においても核家族化が進んできています。

助け合い、共に生きることへの文化や伝統は、今後どのようになっていくのでしょうか？宗教には人と人をつなぐ結束力がありました。また、それが家族愛を育む原動力となっていました。もう一度、私たちは近代的な波をかぶりながらも、伝統文化の包容力、慈愛を感じ、農村の宝を見つけ出す必要があるのです。そのためにも、人生の出会いを大切にし、次の世代に渡したいと願っています。

アーシャの活動を様々な角度から支える

事務局長･三浦　孝子

アーシャ＝アジアの農民と歩む会が発足して20年間。会員の皆様、支援者の皆様、理事、現地スタッフ、国内事務所スタッフ、多くの方々に支えられ、今日まで活動を継続できていることに感謝です。NPOの事務作業はコツコツ、モクモクと、支えるためのたくさんの細かい仕事があります。中でも会計業務は簡単ではありません。

マキノスクールでは、退任された川口さんに代わり、マギーさんが事務局長を務めてくださっており、現地会計を引き継いでくださいました。感謝です。

国内事務所でも、2月より、ハローワークを通して米ノ井富美子さんが会計担当として着任してくださり前会計担当者の漆原さんや丹羽さんがフォローしてくださり、現在は2024年度のまとめ作業に注力してくださっています。

それでも、会報発送作業やモリンガ小分け加工作業、バザー・チャリティ事業のためのマルシェ等への出店活動、「アーシャ」をより多くの方々に広めるためのセミナーなど、国内事務所には数えきれないほどの仕事があります。

共に作業をしてくださるボランティアの方々を歓迎いたします。ご連絡は0287-47-7840まで。

アーシャ日本事務所新任

２月よりアーシャの会計のお手伝いをさせていただく事になりました。
米ノ井(こめのい)
富美子（ふみこ）と申します。
よろしくお願いします。

インド農村開発の現場での約20年間を振り返って

前インド事務局長･川口　景子

2004年に初めてアラハバードに渡り、アーシャインド事業、マキノスクール、現地団体の事務･会計、事業調整･研修、学生･インターンをケアすることに邁進した約20年間でした。多くの変化を創り出す一員として働かせていただく貴重な機会を得ました。

一般農業研修コースは、持続可能な農業･農村開発コースと名を改め、日本人学生も参加できるようになり農村の発展を青年や女性が推進･実践する場としてアラハバード有機農業組合(AOAC)やアーシャ開発奉仕協会(AVSS)を設立、地元農村住民が参加･収入を得る仕組みを確立しました。アーシャの理念のもと、日本からの専門家やインターン･スタッフは、農村住民が活動するにあたり必要な知識や技術、働く上での心の在り方を親身になり課題を共に解決しようとしてきました。

ぶつかることもありましたが、いつか信頼関係が築かれ、そこから受けた感動が彼らの心に生きた泉となり

右から二人目筆者、AOAC食品加工スタッフと共に

働きが継続される動力を生み出しているのだと感じてきました。インドは経済発展が声高に宣伝され、格差のひずみが時に弱者を乱暴に扱います。政府が行う諸所の改革に弱者が対応しきれず(能力不足や情報が得られず政府の方針に対応できない等) 翻弄され「一生懸命やるだけ損」という諦めを生み出しかねない状況があります。私も悔しいことを山ほど経験しました。

そんな中でも農村住民が自ら働きかけて生活を向上していくために学び･経験できることは大きいと思います。

私たち日本人も逞しい彼らの姿に学ぶことが多くあります。昨年12月末に退職に至りましたが、今までご支援いただいた皆様に心から感謝申し上げます。

アーシャの今後の活動が更に実りあるものとなるように、お祈りしております。

インドでの生活と学び

マキノスクール・インターン　西野道宏

2024年度インターンシッププログラム証書を授与される筆者（右側）

皆さん初めまして。
今年の3月からインターンスタッフとしてマキノスクールにお世話になっております、西野道宏と言います。来年の3月まで約一年間、マキノスクールのスタッフとして働きながら、インドの文化やインドでの農業のあり方などについて学びたいと思っています。
僕がインドで学びたいと思ったきっかけは、一年前にアーシャが開催していたインターンシップツアーに参加したことです。約2週間、マキノスクールに滞在し、農村見学や旅行をしながら、インドの文化を体験しました。その中で感じたのは、インドに生きる人のエネルギーの強さです。インドでは至る所で言い争いをしているのを見かけます。初めはそれを見て怖いと思っていたのですが、だんだん慣れてくると、この人たちはなんて気持ちよく自分の意見を言えるのだろうと、むしろ尊敬の気持ちが湧いてきました。また、マキノスクールにいる人たちは、皆優しく、気遣いに溢れていました。一見カオスに思えるインドですが、そこには適度な自我と沢山の思いやりがあるのだと思いました。そんなところに惹かれてしまい、またインドに来ることを決めました。

インドでしたいこと

僕がインドでしたいことは、これからの自分の方向性を見つけるということです。僕は将来、有機農業をする農家になりたいと思っています。ですが、農業を学んでいると、単に栽培技術を学ぶだけが農業ではないと感じるようになりました。農業は世界中の至る所で行われていて、歴史や社会、文化と深く結びついています。そのような広い意味を持つ農業を志すうえで、広い視点を持つということはとても大事なことだと思います。有機農業と言っても、どのような有機農業が求められているのか、自分はどのような農業をしたいと思っているのかをインドでの経験を通して、少しでも明確に出来ればと思っています。また、国際協力の分野にも興味があり、世界共通の農業という課題を知っていくことで、自分が

インターンシップ・プログラム参加者とマキノスクールキャンパスを見学する筆者（右から3番目）

どのように世界と関わっていきたいのかも、見つけたいと思っています。

インドでの生活

インドに来て一か月以上が経ちましたが、一番難しいと感じているのがコミュニケーションです。言語の壁もありますが、僕の性格上、自分からガツガツ行くことが出来ず、何となく分かっただけで流してしまうということがよくあります。ですが、それでは仕事は捗らないし、皆と仲良くなることすらできません。多少恥ずかしい思いをしたとしても、しっかりと理解できるまで相手の話を聞き、伝えるということがとても大切ということを実感しています。しっかりとコミュニケーションを取れるように頑張っていこうと思います。
インドに一年間滞在するという経験は、どのような結果になろうと、僕にとって、とても大きな糧になると思います。周りへの感謝と思いやりを忘れずに、時に自我を出しながら、できることには積極的にチャレンジしていき、この一年間を有意義なものにしていきたいと思っています。そしていつか恩返しができるように、自らを成長させていきたいです。これから一年間よろしくお願いいたします。

2025年度SCSAD学生募集

- 学費　75万円：含まれるもの：研修期間中の宿舎＆食費、インド　国内交通費,研修旅行費、英語集中クラス代、月500ルピー（約900円）小遣い
- 渡航費、ビザ代、海外保険代は自己負担
- 応募資格：2025年6月20日～2026年3月5日　9か月間インドに滞在できる方,高校卒業以上,又は大学を休学できる方,心身健康,チャレンジ精神に富む方。
お問合せ：recruitment@ashaasia.org（担当三浦）

インドスタディーツアーに参加して

カバリェロ優子（宇都宮大学助教授）

ツアー、インターンシップ・プログラム参加者と農家訪問

アーシャとの関わりや経緯

栃木県青年海外協力隊OB会のメンバーに、以前アーシャで働いていた方がいらっしゃり、その方からモリンガの葉っぱをパウダーにして栄養改善と生活向上の支援につなげていらっしゃるということを伺いまして、2023年の春に那須の事務所にお話を伺いに行きました。三浦孝子理事より活動内容を詳しく伺うことができて、大変勉強になり私が今後パラグアイで行いたいと思っているの栄養改善活動の参考になると思いました。

募　集
インドスタディーツアー（一般）
2025年8月31日（日）～9月8日（月）
旅行代金130,000円／1人
インドインターンシップ・プログラム
（学生対象）
2025年8月31日（日）～9月14日（日）
旅行代金：￥135,000円/１人
（日本国内交通費, 渡航費, 海外保険代は自己負担）
本会現地事業スタッフ及びマキノスクールスタッフと一緒に協働作業、近隣の農村を訪問、国際交流に参加し、異文化、農村・農業開発などを学びます。
経費に含まれるもの：滞在費、食費、インド国内研修費及びインド国内交通費、通訳代、観光費
催行：参加者5名以上。
羽田空港又はデリー国際空港集合、デリー空港解散
お問合せ: recruitment@ashaasia.org（担当三浦）

ニューデリー駅に到着。筆者（右から4番目）

スタディツアー参加へのきっかけ

スタディーツアーの募集があることを、栃木の青年海外協力隊OBのメーリングリストを通して知り、現地の活動を実際に見て体験してみたいと思って応募させていただきました。

学生募集へのアドバイス

今回、インターンの学生が全国から5名ほど参加されていました。そのうち海外旅行が初めてで、初めての国としてインドを選んだという方が数名いました。世界一の人口で、様々な人種、宗教が入り混じっている国は、日本とは全く異なる環境、価値観、食事で、これまで複数の国へ行ったことのある自分にとっても非常に新鮮で、日本では気づきにくい様々な社会問題について考えさせられるよい機会となりました。
　マキノスクールでは、有機農法や食品加工の体験やお話を伺うことができ、三浦学長からはインドについての歴史、宗教、文化に関する講義も伺えて大変勉強になりました。
　帰国する際には、国立博物館とガンジー記念館を見学して、釈迦、ガンジー、マザーテレサさんなど、すばらしい方々を輩出された国である理由が少し納得できました。今回の渡航は一週間弱と短かったですが、人生の間に一度は、インドへ来られてよかったと思っています。
　衛生面、治安等気をつけないといけないことは多くあると思いますので、十分に体力を温存して、危機管理や衛生管理には気をつけて渡航されることをお勧めします。

農村開発と人材育成　多様社会の共生への模索

マキノスクールでは設立当初より農村のリーダー育成を重視し農村の若者たちの「持続可能な農業・農村開発コース」を実施してきました。地域文化と食べものづくりに誇りと希望を持ち、むら共同体を強固なものにするために草の根で働く「むらの人材育成」が絶対不可欠なのです。

2025年3月22日に挙行されたSCSAD卒業式

昨年度も７月１日からコースを開始。北東インドから３名、ミャンマーから２名、日本から１名の学生が入学しました。ミャンマーからの学生２名は居住地域が国軍により攻撃を受けているとの報を受け、10月末に早期修了して家族の待つ少数民族居住地に帰国しました。他の４名は３月22日に卒業し、各々それぞれの地域に帰り、活動を始めています。ミャンマーのみならず、北東インドや北西インドのカシミール地方に於ける長期にわたる紛争が後を絶ちません。これらは歴史的な怨念、因縁、そして嫉妬等が相まって起きているようです。殺し合いをしながら持続的な農業・農村開発行為は不可能です。心が憎しみに満たされてしまっては平和を望むことさえしなくなるばかりか怨念は次の世代まで引き継がれていくのです。

村を守り発展させることを誇りとする人材、自然との調和と共存を貴ぶ心、そして多様性を可能な限り理解しようと努力する人材が必要です。更には、武器を農具に打ち換えて、平和の農業を求める人材が必要なのです。卒業生の多くは帰郷後、早速、できることから作業を始めています。彼らに希望があるように、そして彼らの希望が叶いますように祈ります。

2024～2025年 SCSADの卒業生は、早速活動を始めています

北東インド・マニプール州の山岳地帯の集落。標高1200-1800m。雨量はインドの中でも多い。

自宅に小屋を建て、養鶏を開始。将来はカフェを開き、ケーキやパンなども作り、エコビレッジを仲間と作るのが夢と話す卒業生。

菌床キノコ栽培の菌床殺菌装置をドラム缶でつくった卒業生。

菌床キノコ栽培のためのハウスを竹でつくる卒業生。すべて地元にある材料で製作。

2024年度、12月から5月までの活動及び訪問者

1月に入って、元農村保健ボランティア（VHV）による健康食品、モリンガと豆腐料理の試食会を村で実施。彼女たちは、アラハバード有機農業組合（AOAC)の食品加工部門で働いている。
豆腐はデリー、ムンバイなどの都市では普及しているが、地元プラヤグラージでは、健康志向の金持ちのための食品と考えられている。子どもたちに、もっと食べさせたいと普及活動に力を入れている。

AVS（縫製事業）では、バッグ類だけでなく、ヨガパンツやスカートも農村女性が制作。レティカさんは半年前からAVSメンバーに加わわった。AVSの商品は、高品質であると、固定客からの注文が増えている。

12月から3月の比較的温暖な季節に有機野菜の販売をする有機農業組合の栽培農家。彼は毎日1時間近くかかる道のりを2往復して野菜を販売。彼の有機野菜は新鮮かつ、おいしいと評判。販売は順調とのこと。

5月8日、猛暑の中マキノスクールの稲の収穫をコミュニティーイベントとして実施。稲架がけ後、みんなで撮影。

ネパールより3名の若い医師がマキノスクールを訪問。健康食品の普及、特にモリンガについて学んだ。